

公認心理師養成大学・大学院の「心理的アセスメント」および「心理的アセスメントに関する理論と実践」のシラバス分析

山口 祐子・伊藤 弥生

問題と目的

2017年9月に公認心理師法が施行され、日本の心理専門家養成のカリキュラムが大きく変化した。それに伴い、公認心理師養成大学・大学院においては、さらに現場を意識した教育が求められている。心理査定については、公認心理師法(平成27年法律第68号)第7条第1号及び第2号に規定する「心理学その他の公認心理師となるために必要な科目」で定められている。具体的には学部の「心理的アセスメント」、大学院の「心理的アセスメントに関する理論と実践」の2科目が挙げられる。

学部の「心理的アセスメント」の授業内容に含まれるべき事項としては、①心理的アセスメントの目的及び倫理、②心理的アセスメントの観点及び展開、③心理的アセスメントの方法(観察、面接及び心理検査)、④適切な記録及び報告の4つが挙げられている(厚生労働省,2017)。大学院の「心理的アセスメントに関する理論と実践」の授業内容に含まれるべき事項としては、①公認心理師の実践における心理的アセスメントの意義、②心理的アセスメントに関する理論と方法、③心理に関する相談、助言、指導等への上記①及び②の応用の4つが挙げられている(厚生労働省,2017)。心理的アセスメントは、公認心理師法第2条において公認心理師が行うべき業務の冒頭に掲げられており、養成課程教育の充実の必要性は強く感じられるが、各大学・大学院で具体的にどのような学習内容がどのように取り扱われているのか明らかでなく、現状把握が必要であると考えられる。

大学・大学院の学習内容についてはシラバスに記載されている。シラバス分析を用いた研究は、保育者養成課程(金城,2018)などの他領域ではみられるものの、臨床心理分野では数が少なく、心理査定に限定すると福田(2015)の学部段階の心理アセスメント教育に関する研究、加藤(2019)の大学院の心理アセスメントおよび投影法教育に関する研究にとどまっている。

そこで本研究では、公認心理師養成課程における心理的アセスメントに関連する2科目について、教育内容の現状把握のための調査と分析を行い、今後の心理的アセスメント教育のあり方を検討することを目的とする。

方法

分析対象とするデータ

調査・分析データは、公認心理師養成機関連盟に所属す

る正会員機関156校のうち、学部・大学院ともに設置し、かつシラバスが確認できた114校を対象とした。データの素材はWEB上で公開されているシラバスから得た。調査は2020年9月に実施した。

手続き

各大学の学部科目である「心理的アセスメント」、大学院科目である「心理的アセスメントに関する理論と実践」のシラバスのうち、「授業計画(第1回～第15回)」の質的データを対象にKH coder(樋口,2020)を用いテキストマイニングによる分析をおこなった。

結果

「心理的アセスメント(学部)」と「心理的アセスメントに関する理論と実践(大学院)」で扱われている授業内容の状況

KH coderの前処理を実施した。その結果、「心理的アセスメント(学部)」では総抽出語23130、異なり語数1298が、「心理的アセスメントに関する理論と実践(大学院)」では総抽出語24751、異なり語数1390が抽出された。心理検査に関する語の出現回数を明らかにするために抽出語検索として25回以上出現した語のうち上位60以上の語に加藤(2019)で掲載されている心理検査名を参考に作成した心理検査の専門用語40語を加え、強制抽出した語を集計し、「心理的アセスメント(学部)」および「心理的アセスメントに関する理論と実践(大学院)」で扱われている授業内容としてTable1に示した。

この結果、心理検査としてパーソナリティ検査が学部522、大学院566、発達・知能検査が学部213、大学院469、認知機能検査が学部102、大学院96、その他(心理検査を扱わない項目)が学部960、大学院1951であった。

大学院と学部の授業内容の数について χ^2 検定を行ったところ、学部が大学院より多いものとして「作業検査法」($p<.01$)、「P-Fスタディ」($p<.01$)、「Y-Gテスト」($p<.01$)、「内田クレペリン精神作業検査」($p<.01$)、「心理的アセスメント」($p<.01$)、「倫理」($p<.01$)、「信頼性と妥当性」($p<.01$)、「観察法」($p<.01$)、「面接法」($p<.01$)が、大学院が学部より多い授業内容として「発達・知能検査」($p<.01$)、「投影法」($p<.05$)、「ロールシャッハテスト」($p<.01$)、「MMPI」($p<.01$)、「SDS」($p<.05$)、「K-ABC」($p<.01$)、「KIDS」($p<.05$)、「WISC」($p<.01$)、「WAIS」($p<.01$)、「理論・実施・方法」

Table1 「心理的アセスメント（学部）」と「心理的アセスメントに関する理論と実践（大学院）」で扱われている授業内容の状況

心理検査	学部	大学院	投影法検査の種類	学部	大学院	発達検査の種類	学部	大学院
パーソナリティ検査	522	566	ロールシャッハテスト	85	189	K-ABC	8	28
発達・知能検査	213	469	SCT	43	43	新版K式発達検査	27	34
認知機能検査	102	96	TAT	26	15	遠城寺式	11	9
その他	960	620	P-Fスタディ	64	25	津守式発達検査	6	1
計	1797	1751	描画法	59	49	KIDS	0	7
パーソナリティ検査の内訳	学部	大学院	バウムテスト	33	33	計	52	79
投影法	363	435	風景構成法	25	38	知能検査の種類	学部	大学院
質問紙法	124	119	S-HTP	4	8	ウェクスラー式知能検査	50	46
作業検査法	35	12	人物画	10	4	WISC	40	146
計	522	566	HTP	8	17	WAIS	31	140
発達・知能検査の内訳	学部	大学院	家族画	4	9	田中・ビネー式知能検査	40	57
発達検査	52	79	スクイグル法	1	1	創造性検査	0	1
知能検査	161	390	HTPP	1	4	計	161	390
計	213	469	計	363	435	その他の内容	学部	大学院
認知機能検査の内訳	学部	大学院	質問紙法の種類	学部	大学院	心理的アセスメント	452	329
認知機能検査	33	31	MMPI	29	62	報告書・フィードバック	131	121
神経心理学的検査	54	40	TEG	25	15	テストバッテリー	40	39
高次脳機能検査	1	6	Y-G	44	16	理論・実施・方法	18	74
認知症検査	11	9	CMI	0	0	倫理について	77	32
記憶検査	3	10	BDI	6	5	信頼性と妥当性	28	4
計	102	96	STAI	7	5	観察法	99	10
			MAS	3	2	面接法	115	11
			テイラー不安検査	2	0	計	960	620
			Y-BOCS	2	0			
			SDS	1	9			
			POMS	4	2			
			MPI	1	3			
			計	124	119			
			作業検査法の種類	学部	大学院			
			内田クレペリン	30	10			
			ベンダーゲシュタルト	5	2			
			計	35	12			

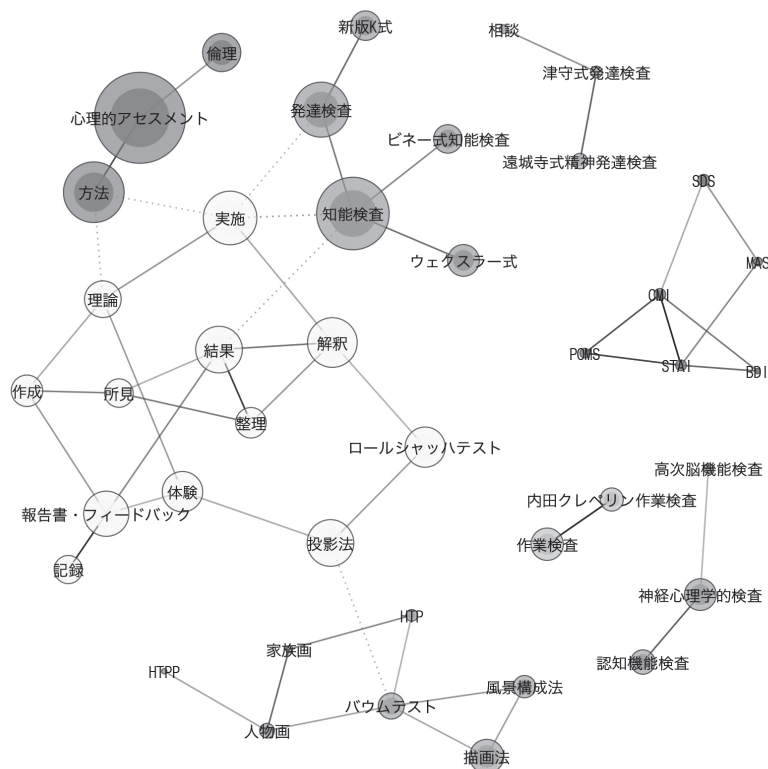


Figure 1 「心理的アセスメント（学部）」のシラバス記載内容の共起ネットワーク

本研究の分類は、加藤（2019）の臨床心理士指定大学のシラバス分析を参考に分類を行った。加藤（2019）の研究と比べると「その他」の内容が学部 960、大学院 620と増加している。これは公認心理師養成科目となった際、授業内容に含まれるべき事項として、学部では①心理的アセスメントの目的及び倫理、②心理的アセスメントの観点及び展開、③心理的アセスメントの方法（観察、面接及び心理検査）、④適切な記録及び報告の4つが、大学院では①公認心理師の実践における心理的アセスメントの意義、②心理的アセスメントに関する理論と方法、③心理に関する相談、助言、指導等への上記①及び②の応用の4つが挙げられたことと関連し、狭義の心理的アセスメントつまり心理検査のみではなく、広義の心理的アセスメントについて取り扱うことが義務づけられたためと考えられる。

学部における「心理的アセスメント」の授業内容の特徴

Figure 1を分析すると、学部では「倫理を含めた心理的アセスメントの概論」「発達・知能検査を中心とする各心理検査」「ロールシャッハテスト・投影法を用いた検査の体験や結果のフィードバック」に関する学習が多く行われていると解釈できる。学部では倫理的配慮など心理検査実施前に留意すべき基礎的事項を教授し、学部生でも実施可能な心理検査を用いて幅広く学んだり、ロールシャッハテストを用いた検査の結果や解釈を学んでいると思われる。ただしロールシャッハテストは大学院と比べて、数が多いわけではないので、体験中心の学習であることが推察された。

大学院における「心理的アセスメントに関する理論と実践」の授業内容の特徴

Figure 2を分析すると、大学院では「心理的アセスメントの概論」「症状尺度や発達検査など現場で使用可能な可能性の高い検査」「幼児・児童を対象とした知能・発達検査での事例検討やディスカッション」「成人を対象とした知能検査の体験をした上での結果の解釈」に関する学習が多く行われていると解釈できる。これは臨床心理士養成大学院における心理検査訓練体験についての調査（依田，2015）でも、成人用（WAIS）・児童用（WISC）が大学院での演習の中で多く取り上げられていることが報告されていることと合致している。学部と比べ、大学院ではより臨床に近い授業内容となり、現場で使われる心理検査を取り扱うことが多い。

近年、発達・知能検査が様々な分野で使用されているため、本調査においても発達・知能検査が大学院の心理査定教育で重要な位置を占めていることが明らかとなったが、その内容をみると、成人対象のものは検査実施ができていたものの、幼児・児童対象のものは事例検討に留まっていた。その理由として、幼児・児童対象の発達・知能検査は実際に体験することが困難であるため、事例検討という形で学ぶに留まっていることが考えられる。しかしながら、発達障害に困る

子どもたちへの支援ニーズは最近特に高まっており、幼児・児童を対象とした発達・知能検査の実践研修の工夫が喫緊の課題と思われる。

まとめと今後の課題

本研究では、公認心理師養成課程における心理的アセスメントに関連する2科目について、教育内容の現状把握のための調査と分析を行い、今後の心理的アセスメント教育のあり方検討することを目的とした。その結果、①心理検査の内容としては学部では平易な心理検査が、大学院ではより難度の高い心理検査が用いられていた。②学部・大学院の両方において広義の心理的アセスメントについて学習内容が及んでいた。③学習内容の特徴として、学部では心理検査実施前に留意点すべき基礎的事項、学部で実施可能な心理検査、初歩的な投影法の学習が多く取り上げられていた。大学院では、より臨床場面で用いられる心理検査を中心とする学習に進んでいたが、幼児・児童を対象とした発達・知能検査の実践研修の工夫が喫緊の課題として浮かび上がった。

今後の課題としては、①シラバス分析の限界、②公認心理師養成科目外の心理査定に関する科目の存在、③現場のニーズの検討の3点が挙げられる。①については、今回KH coderで抽出された語の数で分析したため、実際の授業内容とは異なる可能性が否めない。さらに踏み込んだ検討が必要であろう。②については、今回公認心理師資格取得上必須の2科目に限定し、シラバス分析を行ったが、大学によっては推奨科目として履修を進めている心理査定に関する科目が他にも存在する（加藤，2019）。その科目で扱っている内容を本研究では網羅することが難しかったが、今後これらの科目も含めた検討が期待される。③については、大学・大学院での心理的アセスメントの授業が現場のニーズを反映したものになっているかどうかの検討が最も本質的な課題と思われ、中長期的な取り組みが必要であろう。

引用文献

- 福田 雄一（2015）．学部段階における心理査定の教育の現状：心理検査の採用状況を中心に 広島文教女子大学心理臨床研究，6，28-33.
- 樋口 高一（2020）．『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版．
- 片本 恵利（2005）．樹木画の対提示による心理的アセスメントに関する実習の試み—臨床心理基礎実習における場有無テストの解釈に関する実習— 沖縄国際大学人間福祉研究，3（1），37-53.
- 加藤 佑昌（2006）．臨床心理士指定大学院の心理アセスメントおよび投影法教育のシラバス分析 専修人間科学

論集, 9 (1), 25-34.

金城 悟 (2015) . 保育者養成課程における「保育内容 (人間関係)」「幼児と人間関係」のシラバス構成に向けた基礎的研究 (2) テキストマイニングによるシラバス分析 東京家政大学教員養成教育推進室年報, 5, 65-74.

厚生労働省 (2017) . 公認心理師になるための必要な科目の確認について

<https://www.mhlw.go.jp/content/000412725.pdf>

(2020年10月3日)

日本臨床心理士資格認定協会 . 臨床心理士の専門業務 (2014) <http://fjcbcp.or.jp/rinshou/gyoumu/> (2020年10月3日) .

依田 尚也 (2015) . 臨床心理士養成大学院における大学院生の心理検査訓練体験について 学習院大学人文科学研究所, 14, 169-177.

Syllabus analysis of "Psychological Assessment" and "Theory and Practice of Psychological Assessment" in universities and graduate schools for licensed psychologists

Yuko YAMAGUCHI and Yayoi ITO

The purpose of this study was to investigate and analyze the present state of education in two subjects related to psychological assessment in a certified psychologist training course, and to examine the future of psychological assessment education. The syllabus was analyzed by text mining using KH coder. The results showed that (1) simple psychological tests were used in undergraduate schools and (2) more difficult psychological tests were used in graduate schools. Both undergraduate and graduate students studied psychological assessment in a broader sense, and (3) undergraduate students studied the basics, psychological tests that could be performed in undergraduate schools, and rudimentary projective learning. At the graduate school, the focus was more on psychological testing used in clinical settings, but the developmental and intelligence testing for infants and children emerged as an urgent issue to be addressed. The following three issues were identified as future issues: (1) limitations of the syllabus analysis, (2) subjects related to psychological assessment outside the certified psychologist training courses, and (3) consideration of the needs of the field.

Key words: universities and graduate schools for licensed psychologists, Psychological Assessment, Theory and Practice of Psychological Assessment, Syllabus analysis